

藤井克徳・田中秀樹 著

わが国に生まれた不幸を重ねないために
—精神障害者施策の問題点と改革への道しるべ

藤谷 順子 (国立国際医療センターリハビリテーション科)

「わが国に生まれた不幸」というのは、呉秀三の「わが邦十何万余の精神病者は、実に病を受けたる不幸の外に、この邦に生まれたるの不幸を重ねるものと云うべし」からとっている。病気や障害者になった場合、本人や家族の QOL は社会環境がいかに整っているかにかかっている。ではその社会環境を、誰がどのようにして整えるのか、という問題を扱ったのが本書である。話題は精神障害者問題だが、すべての病気・障害に共通する普遍性を持っている。

本書の後半は、田中秀樹氏の「麦の郷」を中心とした活動の紹介であり、行政や地域住民にいたるまで、周囲の協力をどのようにとりつけ、ネットワークを作り上げてきたか、という地域に根ざした優れた実践の報告である。また、「不登校者の一部に病気が原因の場合がある」、「学齢期を越えると教育関係者の訪問もなくなり、そのまま家族のみの問題になり、何年も誰の目にも触れなくなってしまう」というように、不登校を一つのサインとした早期発見、早期リハビリテーションの必要性に触れるなど、今後の精神障害の発症・重症化予防にまで関係するバランスのとれた視点での指摘が多い。一方、そのような優れた活動でも、補助金はわずか公衆電話 1 台

分の 2 分の 1 の費用だったりするのが現実であり、やはり行政を、法律を変えてゆく必要を感じさせられる。

そこで前半部分である。ここでは、1950 年代から今日に至るまでの精神障害者関連の法律制定・施策の動向が解説され、初心者にもわかりやすいサマリーとなっている。さらに、期待にもかかわらず不十分な内容の法律・施策しか制定されてこなかった事態の分析がなされ、「好機を逃し続けてきた」ことに対する、関係団体の一人の責任者としての真摯な反省が述べられる。施策が遅れているのを批判するのはたやすいが、今後、よりよい社会をつくるために何をしていけばよいのか、そのなかでも、鍵となる時期に、関係者団体が、的確な戦略をもって、積極的に、効果的な行動をする必要があることがよくわかる。

今まさに、支援費制度と介護保険制度の合併問題たけなわである。現場での実践と大局的な見通し、実践と分析と戦略、中での仕事と外への積極的な活動のバランスが重要だ、ということを教えてくれる好著である。

(A5 判 頁 171 1,600 円＋税 2004 萌文社刊)